



Soka University Graduate School of Teacher Education News Letter

研究科長 石丸憲一先生



● ニュースレターの発行に寄せて

教職大学院は5年ごとに「認証評価」という厳しい外部評価を受け、「適合」とするとさらに5年の教育活動を行うことが認められます。本年度、その評価を受審し、「何とか」か「見事に」か、いずれにしても適合の評価を受けました。この評価で最近求められるようになってきたことが、院生、修了生に表れる「成果」です。教職大学院の学びにより立派な初任者となっている、あるいは、現場で学校を支える教員になっていることは確かですが、それを形にして示す必要があるのです。

教職大学院にいるときには、実地研究の報告会をしたり、教職課題研究論文の発表会をしたり、また、創価大学教育学会で学会発表デビューをしたりと様々発信をする場面がつくられていて、それを当たり前のように受け止めていることと思います。このニュースレターもその一つと言えるでしょう。ところが、修了し、現場で発信することはなかなか難しく、次第に発信することから遠ざかってしまいます。小さなことと思っていることでも、発信することにより新たな意味が生み出されます。院生の手によるこのニュースレターが、創価大学教職大学院の発信源になったらうれしい限りです。

創価大学 教職大学院

〒192-0003 東京都八王子市丹木町1-236

042-691-9494

〔お問い合わせ・詳細等はこちらから〕



2025年度 修了生 研究テーマ

人間教育プロフェッショナルコース 2年制

阿部 志信	身近な爬虫類に対する小学生がもつ嫌悪感の実態とその軽減策 —ニホンヤモリを例に—
安藤 紗英	保護者と信頼関係を築く教師の在り方に関する一考察 —教師・保護者へのインタビュー調査を通して—
磯崎 良美	高校生を対象としたグループ学習への好き嫌いの理由を探る —対人交渉方略（Giver/Taker/Matcher）に着目して—
川村 徳子	多文化共生社会に向けた児童・生徒への学習支援 —総合的な学習の時間を通じて—
木村 恵	学校・企業・地域の持続可能な連携・協働のあり方に関する一考察 —小学校における「探究シブヤ未来科」の事例検討を通して—
桜井 広稀	歴史総合における本質的な問いに着目した学習 —真正な学習を手がかりにして—
主濱 勝也	中学校社会科における主体的に学習に取り組む態度の評価 —コーネルノートに表現される「問い」に着目して—
竹林 和史	通常の学級における特別支援教育の視点を活かす授業の分析と考察
中尾 友聖	児童の授業不安の実態と担任教師の対応
三原 絵理子	中学校国語科における批判的読みの研究 —能力分析を中心に—
米谷 拓	中学校における考え議論する道徳授業の研究 —揺れを生み出す発問を中心に—

プロフェッショナルコース2年制 安藤 紗英



研究での一番の学びは、保護者との信頼関係は、子どもとの関係性構築が最も重要な要因となることです。子どもに誠実に接していれば、子どもが保護者に伝えてくれる。保護者になにか特別なことをしようとしなくても子どもの姿から伝わっていることをインタビューで知ることができました。保護者、教師それぞれにインタビューができたことがとても大きかったです！

また、次は私が教師として、インタビューした先生方と同じように子どもと関わったり保護者と信頼関係を築いたりしていきたいです！

プロフェッショナルコース2年制 主濱 勝也



中学校社会科において、コーネルノートを用いて生徒自身に「問い」を書かせることにより、主体的な学習態度を評価することのできる授業を提案しました。

本研究から、自ら問いを生み出す過程こそが学びの原動力になることを学びました。今後はこれらの「問い」を起点に、生徒を主軸とした授業づくりに尽力します。

プロフェッショナルコース、リーダーコース
詳しいカリキュラムはこちらから



人間教育プロフェッショナルコース 3年制

浅野 時光	生徒の青春の自己表現の先にある背景や思いの分析 —ナラティブ分析を主軸として—
有賀 洋一	小・中接続に向けた小学校外国語活動の音声指導モデル提案 —マザー・グース活用に焦点を当てて—
井元 鳳翔	学校教育における宿泊体験学習の意義に関する一考察
北久保 信一	自律した学習集団の形成に関する一考察 —高等学校数学科における「学び合い」の実践を通して—
谷平 真弓	探究の過程を重視した“問い続ける力”を育む教師のアプローチ —小学校理科教員へのインタビューを通して—

人間教育実践リーダーコース

種山 直人	読解と読書活動を繋ぐ文学の指導 —初発の感想を手立てにして—
今井 貴大	特別支援教育コーディネーターが効果的に機能するプロセス —コーディネーター複数配置の小学校に着目して—
内田 豊	教員の同僚性を構築し、高める校長のマネジメントについての一考察
佐生 瑞穂	幼小連携における“子ども理解”の継続と教員の専門性向上 —園と小学校の教員の語りから—
佐藤 紀子	学校組織における心理的安全性の形成に向けたマネジメントに関する一考察 —校長・教務主任の語りから—
高橋 昭博	都立特別支援学校における防災教育充実に関する研究 —防災教育推進委員会と地域連携の現状分析をとおして—

プロフェッショナルコース 3年制 浅野 時光



研究を通して私は、「一人」をありのまま理解しようとすることの偉大さ学びました。たった一人されど一人。その人の感情や思いに触れられたことは貴重な時間でした。

生徒の思いを授業に反映できるよう、まずは一人を理解しようとする姿勢を現場でも生かしていきます。そして、自分自身のことも理解するために、日々の感情や思いを様々な表現で綴っていきます。

リーダーコース 今井 貴大



研究の分析と分析方法の学習を並行して進めるのは、ずっと霧の中で模索する感覚でした。しかし、指導教員やゼミ生との議論を重ねる中で視界が開け、語りの言葉を丁寧に受け止め、読み手に伝わる表現へと磨くことの大切さを学びました。校内の特別支援教育推進に対して今回の知見を生かすとともに、各校への還元と学びの継続に努めていきます。

今年度ご退任される先生より



● 関田 一彦先生

私の在職期間は教職大学院の所属に限ると10年に満たない。その中では特に「人間教育の理論と実践」は色々な先生方がオムニバス形式で各々の人間教育を語る、印象深い科目であった。私は春学期のアンカーとして最後の2週を担当したので、他の先生方の授業にも参加し、様々な刺激（思索の種）を頂いた。そんなこともあり、人間教育を自分なりに語ろうと意識してきたが、ちょうど『東洋哲学研究』64巻1号に人間教育の特集が生まれ、「『人間をつくる』という人間本来の営みを『人間教育』と捉え、『学び舎とシステムに教育の理念がたんに埋め込まれるのではなく、人間をつくるための運動の広がりそのものが教育である』」（p.5）という、極めて重要なまた明快な視座が提供された。

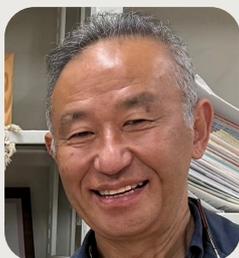
これは学校という校舎の中で学習指導要領に沿った授業を提供するシステムに対応・適応するだけでは不十分であり、人間をつくる営み以外の教育が行われているのではないかと、との指弾である。では、創価大学の教職大学院に学んだ卒業生たちは、本当に「人間をつくる」営みに十全と取り組んでいるのであろうか。私たち教職大学院の教員は、そのために何を為し、あるいは何を為さずに（為し損なって）きたのか。自省せずにはおられない。

教職大学院は2008年の開設に際し、創立者池田大作先生より次の3つの指針を戴いている。

- 一、子どもの幸福を目指す慈愛の教育者たれ！
- 一、生命の尊厳を護り抜く正義の教育者たれ！
- 一、平和の世界を創造しゆく英知の教育者たれ！

これらは教職大学院に学ぶ者全てに向けた呼びかけであり、期待である。これを受けて、教職大学院のHPでは「創立者の理念に基づき、学校現場のニーズを生かした授業を展開しています。研究者教員と実務家教員による多様な教育方法・学習方法を取り入れた授業展開で、実際の教育現場で真の“人間教育”を行うことができる教員を育みます。」と宣言している。

実際、院生たちに教育の目的を問えば「子供の幸福」と答える。一つ目の指針に忠えて、そうした教育者になろうという自覚・覚悟はあるのだろうか。では、二つ目、三つ目への自覚はどうであろうか。私たち教員も、教職大学院での学びを一つ目に絞って語り過ぎてはいないだろうか。生命尊厳の真逆である戦争容認の社会風潮に対し、毅然とその誤りを糾す教員であるための備えを援けているだろうか。目の前の学校の日常と葛藤しながら、世界的視野で平和の連帯を創り、繋がるための英知を磨く手伝いはできているのであろうか。教職大学院開設20周年に向けて留意頂ければ幸いである。



● 宮崎 猛先生

高校教員23年、創価大学に専任教員として20年在職しました。出会った多くの学生、先生方に心より感謝申し上げます。

高校では困難校での勤務が多く、学びから逃避する生徒たちと向き合ってきました。授業が成立するようになった頃、「学ばされている生徒」という関係を取り繕っているだけではないかという疑問が残り、学びの意味を考えるようになりました。

生徒の挑戦に背中を押され、私自身も大学院に進学しました。生徒と同じ立場で学び、挑戦してみたいと思ったからです。そこで出会ったのが、オーセンティックな学びとサービス・ラーニングでした。学びを社会の文脈の中に位置づけ、参加し、関わり、貢献しながら深めていく。その過程そのものが、人が育つ、変わっていく営みであると感じ、そこに教育の本質を見出すようになりました。

高校ではその学びを総合的な学習などに取り入れ、学会発表や論文にも挑戦しました。学部ではゼミ生とともにSAGEを立ち上げました。高校生が大学生のサポートを受け、社会貢献プロジェクトに取り組むものです。

「創価」の看板を掲げての挑戦には多くの困難がありましたが、今では文科省からの後援など、多くの協力を得て今日に至っています。

教職大学院には立ち上げの2年前から準備メンバーとして加わることになりました。すべての授業が「楽しい」の一言でした。リーダーコースとの人間教育のディスカッションではいつも新たな学びが紡ぎだされるワクワクの時間でした。教育課題実地研究は学生と手探りの開拓、実践でした。単なる視察ではなく、参加して学ぶ、貢献して学ぶ、というサービス・ラーニングに基づく実践でもありました。英語を使っての実践は学生にとってだけではなく、私にとっても身の丈以上の挑戦でした。同行した院生は私にとって同志と言える存在となりました。

「ともに学ぶ」だけでいいのか、そんな不安が時によぎります。その折、設立に尽力された木全力夫先生が、「教師と学生のあいだに教育実践者としての共同性・平等性・同僚性が育ちつつある」と記された言葉に励まされました。上下関係を越え、ともに専門職として学ぶ関係を築くこと。それが本学教職大学院の特徴の一つであったと思います。同時に私も自らの力量を高めなければと決意を新たにしてきたように思います。

創価大学に教職大学院を設ける意義は何か。その議論の中心にあったのが、「人間教育」を中核に据えるという理念でした。人間教育とは将来の準備のための手段ではなく、人の可能性の開発それ自体を目的とする営みではないでしょうか—これからも皆さんとともに問い続けていきたいと思っています。